

# 刊 行 に よ せ て

## —日本から世界の“常民”文化研究へ—

本年は、柳田國男没後50年、来年2013年は、渋澤敬三没後50年の記念すべき年となる。国際常民文化研究機構の拠点である、渋澤により1921年創設された日本常民文化研究所も90年余の歴史を歩んできたことになる。

本機構の活動趣旨は、漁業制度史と民具研究を二つの柱としながら渋澤敬三はじめ宮本常一、網野善彦、河岡武春ら諸先達により、日本の庶民、特に海の常民、海民の暮らしぶりの実証的研究において多大な成果を上げてきた日本常民文化研究所の資料の蓄積と調査研究の成果を関係する研究者に提供するとともに、わが国で築かれてきた普通の暮らしをする普通の人々の生活史・誌を描く資料論・視角の有効性を国際的に問うところにある。2010年7月に開催された本機構の提携機関、韓国・慶北大学校嶺南文化研究院主催の国際シンポジウムでは、欧米の日常史というジャンルの取り組み、民具や図像の資料的性格が論議された。柳田や渋澤が提起した、「常民」の研究に新たな光が与えられつつある。本年12月に開催される韓国民俗学会の年会では、「常民」の概念が主題になるという。

日本常民文化研究所は人文系研究所としてはわが国で最古参の一角を占めるが、1982年神奈川大学に招致されて以来、1993年大学院歴史民俗資料学研究科の設立、2003年文部科学省21世紀COEプログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」の採択、その後継組織として2008年非文字資料研究センターの附置、2009年には文部科学省の共同研究拠点として、本機構の名で認定されるなど、およそ10年単位で新たな足跡をしるしてきた。本機構は、その流れの中で、国際常民文化研究という新たな調査・研究課題に学内外、80名余の共同研究員で挑み、研究の持続・活性化に励んでいる。本年報は、その年次報告の一部にすぎない。

個別の論考、調査報告、活動業務の詳細は本文に譲るが、本年度は、国際共同調査を瀬戸内海・二神島で、中国・韓国の研究者も参加の下で実施でき、また、中国・舟山列島蟻島、韓国・多島海では二国間の調査が行われた。また、ブラジル移民の調査・研究を民具・民家の変遷などに焦点を当て開始できたことは、特筆したい。

海洋文化に関する諸史料、庶民の日常史資料としての民具の調査・研究法などに対し、中国・韓国をはじめ世界の研究者が注目し始めている。漁業法の整備にしても漁場や漁期

など慣習から立ち上げた体系が必要である。海の民、日本人の培ってきた海洋知が国際的に要請されているといえる。海域をめぐる国際情勢にしても、まず学術方面の共同調査が要請されるべきだと考える。また、瞬時に地域を超えて情報が結ばれ、大容量のデータ収蔵も可能となったインターネット社会の今日では、等身大の日常性研究の導入として目に見える民具は有効な非文字資料といえる。言葉は判らなくとも、民具という可視的な「モノ」はそれだけでも多くの情報を語ってくれる。

このような日本における常民文化研究の調査・研究の蓄積を国際的に提示・提供し、その検証により人類文化の研究に貢献する志向と具体的実践への取り組みを、横浜という開港場に所在する大学の研究所、研究機構として、“海が結ぶ世界”の標語のもとに国際常民文化研究としてはかることが、「常民」研究を唱えた柳田・渋澤の意をさらに発展することになると考えられる。柳田・渋澤両大人の50年忌にあたりこの場を借り、わが意を述べさせていただいた次第である。

2012年 8月吉日

国際常民文化研究機構運営委員長

神奈川大学日本常民文化研究所長

佐野 賢治